

三重県史跡

鳥羽城跡(第6次)発掘調査現地説明会

～本丸跡の範囲確認調査～



九鬼氏の時代の石垣発見!!

姿を現した石垣



- 1 事業名 歴史的資源発掘調査(建設課) 県指定史跡鳥羽城跡発掘調査業務(教育委員会)
- 2 所在地 鳥羽市鳥羽1丁目 1634 番地1
- 3 調査期間 平成 23 年7月8日～平成 23 年 11 月 30 日
- 4 調査機関 鳥羽市教育委員会

平成 23 年 10 月22日(土)
鳥羽市教育委員会

1 発掘調査に至る経緯について

鳥羽城については、文禄3(1594)年に九鬼嘉隆によって築城されたとされますが、これまで本格的な発掘調査は実施しておらず、詳細は不明でした。

近年、鳥羽市のまちづくり交付金事業により、相橋や三の丸広場をはじめ城山周辺の整備が計画されていることから、城の痕跡の有無も含め、基礎的なデータを得るために7月から範囲確認調査として発掘調査と石垣の測量調査を実施しています。

2 調査場所について

鳥羽城跡は、明治4(1871)年の廃城時や昭和の戦時中、昭和4(1929)年の鳥羽小学校の建設などにより幾度となく改変が加えられていて、絵図と現況との照合が困難な状況にあります。

今回の調査では、城の中核部分である本丸跡(旧鳥羽小学校)の遺構の確認のために、幅2mのトレンチを十字に設定して、遺構の残存状況と、天守台や本丸御殿などの位置関係の解明を目的として268㎡の面積で調査を行いました。

3 現在の調査状況について

鳥羽城には5間×6間の3層の天守がそびえていたとされ、絵図にも描かれています。今回、天守台の位置を確認するため、調査区を設定しましたが、表土から10cmほどで地山である岩盤が現れました。現在のところ石垣の根石やその痕跡は確認できておらず、明治時代以降にかなり削平されているようです。

また、天守の西側からは、石列と瓦敷きの溝が確認され、土塀、ないしは土蔵の跡と考えられます。中央部では、石組みの溝が確認されています。この溝は南側に向けて落ち込んでおり、北側に天守台の石垣といった高い構築物からの雨水を受けるために作られたと考えられます。注目すべきは、その西隣に同様の雨落ち溝が時期の古い下層からも出てきました。この溝から古い特徴をもつ瓦が出土していて、築城主である九鬼氏の時代の石垣とそれに伴う遺構と考えられます。

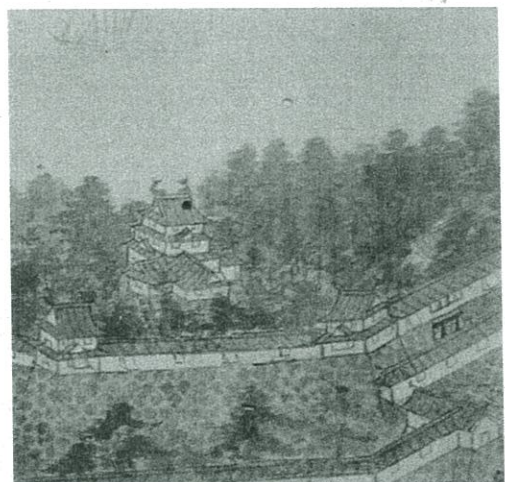
調査区中央の東側からは、従来認識されていなかったL字形の石垣を発見しました。これらは、江戸時代の絵図に描かれていない石垣で、長さ8.4mで、南に5m折れています。石垣は高さ約80cmで、3段から4段で、鳥羽市の周辺で採取できる石英片岩やカンラン岩などで構成されています。石垣は、地山である岩盤を掘りこんでから積み上げています。

運動場の南側(旧鳥羽小学校寄り)では、本丸御殿の一部とみられる石列が確認されていて、御殿本体から西に延びる出っ張り部分のものと考えられます。

また、地山の岩盤が浅いレベルで出てくるところと深いところがあり、今は平坦な本丸跡ですが、最初に城を築城する時には、地形的に高低差があって、天守はその一番高い場所に建っていたものと推定されます。



鳥羽城の絵図(鳥羽市立図書館蔵)



描かれた鳥羽城の天守

調査区平面図

(S=1/250)

点線は推定されるライン



発掘調査区

天守台

瓦敷の溝

土蔵

雨落ち溝

(新)

雨落ち溝

(古)

石垣

瓦廃棄土抗

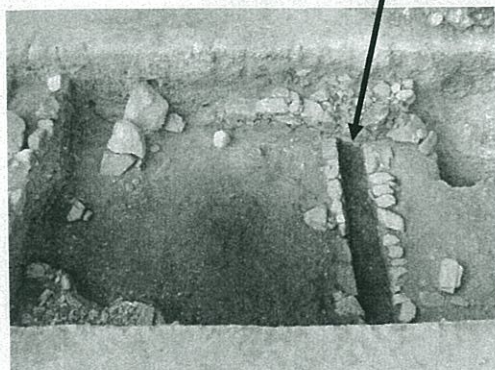
石列

本丸御殿

井戸



土蔵跡か



下から古い雨落ち溝がでてきました。



新旧の雨落ち溝



出土したL字に曲がった石垣



本丸御殿の石列

4 出土遺物について

出土遺物は瓦の廃棄土抗などから、大量の瓦片が出土しています。瓦は良好な残りのものが少ないのですが、多種多様な瓦が出土されています。特筆すべきものとしては、九鬼嘉隆の時代の左三ツ巴の瓦、九鬼嘉隆の息子である守隆の家紋（七曜文）の入った鬼瓦片や、九鬼家のあとに城主となった内藤氏の家紋（下がり藤）の入った家紋瓦、最後の藩主であった稲垣氏の家紋（抱茗荷）入り軒丸瓦などが出土しています。また、内藤氏の家紋瓦の中には、瓦に家紋のスタンプを押しているものがあり、珍しいものです。

土器類は、皿や鍋などの土師器や天目茶碗や磁器片などが多くはありませんが出土しています。



九鬼氏の時代の瓦



七曜文入りの鬼瓦片



内藤氏の家紋瓦(左)と刻印(右)



鯨瓦の片

調査のまとめ

今回の発掘調査では大きく以下の6点が判明しました。

- ① 天守曲輪に関連するとみられる雨落ち溝などの遺構を確認したこと。
- ② 九鬼氏が城主であった16世紀末頃の石垣を確認したこと。
- ③ 出土した瓦から、九鬼氏の段階に築城されていることが発掘調査によって実証されたこと。
- ④ 築城時の本丸は高低差があった地形でしたが、江戸時代に整地されていることが判明し、鳥羽城が近世城郭として整備されていく過程が確認されたこと。
- ⑤ 天守台想定地は削平が著しいが、本丸御殿は残存している可能性が高いこと。

鳥羽城については、九鬼嘉隆が築城し、九鬼家の後に城主となった内藤氏の時代である1643(寛永20)年頃に、近世城郭として整えられたとされており、九鬼家の時代の城郭がどのような形態であったかはよくわかりません。出土した七曜文の瓦は九鬼守隆の代にも何らかの工事を行ったことを示しており、守隆の築城記録が残っていないこともあって重要です。今回確認された石垣や雨落ち溝などは九鬼氏が築城した当初のものと考えられ、鳥羽城の築城過程をさぐるうえで画期的な発見となりました。